

古明地さとりは

凶太く生きる

著・イラスト
FALSE



目次

一	例えば心を読む程度の能力が失われたとして……………	5
二	例えば地霊殿当主の面目を潰されたとして……………	65
三	例えば凶悪な敵が彼女の財産を脅かしたとして……………	146
結	祭が終焉を迎えても……………	224

当作品はZUN氏が制作している「東方プロジェクト」シリーズの二次創作作品です。
本作における、人物・団体は原作に必ずしも一致するものではありませんので、あしからず
ご了承ください。

一 例えば心を読む程度の能力が失われたとして

私の平穏な時間を破るのは、いつも妹のこいしでした。

『さとり様、本日も麗しゅうございます』

『今日も焦熱地獄は順調に燃え続けております』

私は卓上で、書類など取りまどめておりました。そこに、青白く燃え盛る怨霊が二体三体とまとわりついてまいります。ああ、やつらの声など雑音にも勝ることはありませんよ。なにしろ怨霊は「止まった」魂なのですから。

彼らは成仏できません。地獄に落ちることもできません。なにをしたところで報われずに、消えるまで燃え続ける以外なのです。それなのに、やつらは自らの運命について悟ることも学ぶこともありません。だからこうして毎日懲りずに媚を売りにやって来ます。皆様はどうか、亡骸を火車に持ち去られぬような人生をお送りくださいますよう。

そんなことより、こいしのことでした。内心私はあの子がやってくるのを、全方向に注意を張り巡らせて待ち構えておりました。こいしは、いつ、どこからでも現れます。まるで油断がなりません。

そうこうしているうちに見慣れたベージュ色の袖が、首筋へとずりりと巻きついていました。ああ、今日はうしろからでしたね。

「お姉ちゃん、ただいま」

「部屋に入るときはノックくらいしろといつも言っているわ、こいし」

私は空いているほうの手で、こいしの腕を抱きかかえます。土の匂い、雨の匂い、草花の匂いが一緒にたになって、私の頭の中を駆け回りました。

「それから、あとでお風呂に入って来なさいな」

「お姉ちゃんはいつも書き物ばかりなのね。少しは別の暇つぶしを覚えたらいいのに」

こいしは私の小言を、ろくに聞いちゃくれません。まあ、いつものことです。この子は私がどんなに「第三の眼」を凝らしても、心が読めません。なのでこの子のことを知るためだけに、私は言葉を尽くさねばならぬのでした。

「記録は私たちにとつて、大きな助けとなるものなのよ。一文とておろそかにはできないわ」
「そんなことより、聞いてよお姉ちゃん。今日、地上に遊びに行つたときのことなんだけど」
「はいはい。今日は誰と遊んできたのかしら？ 面霊気？ それとも『外』の超能力者？」

開け放した窓からそよ風が吹き込んで、私どもの髪を揺らしたのはそんなときでした。気がつくくと一羽の白鳩が、机の上に降り立っていました。足には小指にも満たない太さの金属筒が備えつけられております。すなわち彼女は、地霊殿ちれいでんに飼われる伝書鳩の一羽というわけです。

私はこいしの腕を抱えたままで、筒から書簡を取り出しました。この子の手が紙に触れないように気をつけながら、内容を読み上げます。

「旅行者の一団、地獄検問を通過。総勢二十四名、引き継ぎを完了」

残念、どうやらこいしとの逢瀬は早くも時間切れのようです。私は呼び鈴を鳴らしまして、雑用ペットの一人を呼び出しました。

「お客様をお迎えにうかがいます。お空を呼びなさい」

「かしこまりました」

ペットを送り出して立ち上がりおりました。すると、こいしの体がより強く重くしなだれかかっています。脇を見ると、こいしの顔がせり出しました。その様子は、こいしウォッチ歴ウン百年の私をして少々口をとがらせているように見えたのでした。

「今日も忙しいのね」

私はこいしの頬に軽く接吻などしてやりました。脂っこい感触と、少しの塩味がします。

「ごめんなさいね、あまり構ってあげられなくて。湯浴みを済ませてきなさい。あと、食堂にお食事を準備してあるはずだから自分の分を温めて食べなさい」

「はい」

こいしを引っぺがして箆笥に向かいます。中から取り出したのは、薄紫色の和服でした。「それから、たまにはちゃんとした時間に帰ってきなさい」

うしろを振り返ります。こいしの姿はもうどこにもありませんでした。いつもだったらもう少し、注意深く探すのですが。残念ながら、今は忙しいので。

和服の前を合わせて帯を締めれば、気分的にはもはや女将です。形は大事です。私は履き物を下駄に替えて部屋を出ました。外はエントランスに続く廊下となっております。

そこにはいろんな連中がひしめいております。空中にはさまよう怨霊どもが。地上には私を慕って集まってきたペットたちが。それらを遠巻きから眺める人間たちの姿が。

はいそうです、人間です。空を飛ばません。弾幕も張れません。妖怪に狙われたらなすすべもなく、餌食になってしまおうでしょう。そんなごく普通の人間が、ここにいます。

彼らにとつて、地霊殿の動物たちはたいへん物珍しいようです。犬猫くらいしか飼う習慣がないのですね。慣れれば可愛いものなのに。

そこで私は、一人の男に目をつけました。そいつは通路の片隅を、一心に見つめています。そこには、毛づくろいする一匹のシャムがいました。

「彼らは、地獄の過酷な環境で生まれ育った動物たちです。地上の空気にはなじみませんわ」
そいつは目に見えるほど肩を震わせると、石臼みたく重々しい首をこちらに向けました。

「い、いやいや。こんな場所にも大人しい生き物があるんだなと思っただけで、決して持ち帰りたいと思っただけでは」

「だけど己の武勇伝を言いふらすために、物証は必要とは思っていらっしやる。代わりに私が

「お知り合いのところへ行って、証言して差し上げましょうか？」

「そいつは信号みたいな顔で、赤くなったり青くなったりしながら手を振りました。」

「け、結構です」

「くれぐれも、盗んでいこうなどは考えぬように。自由を奪われたこの子たちが、あなたになにをしでかすかも知れませんわ。こう見えて、弱肉強食の旧地獄を生きる動物なのですから」

石像になった男のことは、もはや捨て置きます。通路をつむじ風が吹き抜けました。顔を向けてみると、黒い翼を背負った私のペット、霊鳥路空れいじうくわが私の目の前に降り立つところでした。

「さとり様、遅くなりました！」

「急いでもときでも館内は走らない、飛ばない。もう忘れたの？」

すると息も切らさずここまで飛んできた空の顔に、汗がどつと湧いて出ました。

「はっ！ そうでした、ごめんなさい！」

「これで二回め。スリーストライクの罰はなにがいいかしら」

「すみませんすみません、トラウマ想起の罰だけのご勘弁を！」

必死こいて両手を合わせ、私に頭を下げます。いや実際はこれで百二十四回目なんですけど。説教した回数までももの見事に忘れて困ったものです。八咫鳥やたがらす様もお空あそらの小さすぎる記憶容量を、もう少し増やしてくればよかったです。

今はペットいじめをしている暇がありません。平伏するお空の肩をぼんぼんします。

「まあ、いいです。間もなく今日のお客様がここに着きます。付き添いを頼みますよ」

「了解しましたあ」

ちょうどベットの一人が、番傘を手に現れました。私はお空に傘を開かせて、その脇に立ちます。右足だけに鉄のブーツを履いて、左右で異なるお空の足音を聞きながら、外に出ます。地底の頭上はどこまでも真つ暗な岩天井です。雨が降ることも、忌まわしき太陽に焼かれることもありません。が、傘はいい具合に私の顔を影に誘い込んでくれました。

地霊殿の門を出てしばらく行くと、賑やかな旧都の大通りにさしかかります。そこには鬼を始めとする、地底の妖怪たちがひしめいております。やつらは鼓や手拍子に合わせて酒を酌み交わしたり喧嘩に明け暮れたり、私の姿を見てそそくさと間合いを測ったりするのです。

やがて私たちの前に大きな壁が立ちはだかりました。人ばかり、ならぬ鬼ばかりです。一様にこちらに向けて背を向けております。なにかを取り囲んでいるようにも見えました。

連中の心を読むにつれ、それは私たちにとっては具合の悪いことだとわかってまいります。しかしこういう物事は冷静さが肝心です。私はあくまで足取りを速めず、お空にもそのようにさせながら近づいていきました。

すると聞こえてきたのは、これまた私のベットかえんがようりんの火焰猫燐かえんがようりんの声でした。

「困るねえ、星熊のお姐さん。この人たちは地霊殿の客人だよ。ちよっかいを出せばさとり様の面目を潰しちまうことになる」

現在、お隣にはお客様の送迎を手伝ってもらっています。鬼たちの隙間から見える彼女は、お客様たちをうしろにかばって、不敵にもとある鬼にそう毒づいておりました。

「そんなことはわかっている。だがうちのもの肩に人間どものが触れたと言うんだ。詫びの気持ちの一つも見せてもらわんと、ここを通すわけにはいかないねえ」

その鬼というのが星熊のお姐さんこと星熊勇儀ほしよゆうぎでした。今のところ、旧都ではいちばん強いやつです。要するに、旧都ではいちばん顔が利くやつでもありました。

勇儀の脇には一人、異なるものを抱えた鬼が立っておりました。どうやらお客様の一人のようです。襟首をつまみ上げられて、青ざめた顔で足を空中に垂らしております。このお客様が、鬼たちに粗相をしたということになりましようか。

頭ふたつほど上背のある鬼の肩に、どうやって触れたのでしょうか？

「なーに言ってるんだい、肩なんて触れちゃいけないくせにさ」

「おう、聞き捨てならねえな。俺たちがそんな嘘をつくとも言うのかよ？」

なるほど鬼は嘘はつかなくても、勘違いはすることもあるだろうという。大した論法です。勇儀も手下の言い草を咎めようとはしません。

「ほれ、こうも言っている。なに、客人どもにはちよいと地霊殿に着く前に寄り道をしてもらおうだけさ。それならさとの体面は保つだろう？」

「分単位でおもてなしのスケジュールを組んでいるこちらとしては、大問題ですわね」



UTSUHO

SATORI

KOISHI

RIN

YUGI



そこへようやく、私たちの到着です。鬼たちは私の姿を見るや、勇儀一人を残して私たちの左右にぎあと谷を作ります。残った鬼の頭領は、私たちにも聞こえるくらいに盛大な舌打ちの音を響かせました。

「ずいぶん遅いお越しだ。最初からあんたが迎えに出りゃあいいものを」

「各々決まったお勤めがございます。当然主人である、この私にも」

お空はお隣の姿を目にするや傘を閉じました。右腕にみるみる金属じみたなにかが集まってきて、六角柱の棒となります。お空はそれを、八咫烏様のお力を自在に操るためのものですと言っておりました。原理はよくわからないのですが。

「お客様を解放していただけませんか。ただけなとなれば不本意ですが、こちらとしても少々手荒い手段を使わざるを得なくなりませう」

「私の都を、そいつの胡乱な火で焼こうっていうのかい？」

勇儀ときたら、右手には大きな盃を掲げております。しかもなみなみと酒が注がれたままで。そうこうしている間にお空が左手を突き上げますと、その指先に熱を持つ光の玉が現れました。私はお空を手で制したまま、しばし勇儀の様子を見守りました。そんな勇儀は私を見据えたまま、心の中で（こういう茶番は実に性に合わん）と毒づいたのでした。

「たかだか人間の身柄一つで、争うような話じゃあない」

「賢明な判断です」

勇儀が、鬼たちに目配せをします。すると、お客様はようやく地上に降ろされたのでした。私もお空に八咫鳥式人工太陽を作るのを止めさせます。

お燐とお客様たちに近づいていきます。勇儀の脇をすり抜ける格好です。私は彼女にそっと小さな声でつぶやきました。

「本気で連れ去ろうとなさるのは、ご勘弁いただききたいのですが」
（多少の真剣が混ざってなけりや、こいつらも怖がらんだろう？）

勇儀の心中を私は聞き流して通り過ぎます。お燐と肩を並べると、お客様たちに深々と頭を下げました。未だ彼らは、左右を固めた鬼たちを恐れております。

「まずは怖い思いをさせたことをお詫び申し上げます。私が地霊殿主人の古明地こめいじさとりです。ここからは私が皆様を地霊殿までご案内差し上げますわ」

旅行者たちの、心のざわめきが聞こえて来ます。

「こんなことに巻き込まれるなんて聞いてない、ですか？ いえいえ、これはほんの序の口。ここまでご足労いただいたのならば、この『旧地獄めぐり』の心得はご一読いただいたはず」

さらにお客様の心を読みます。まさか本当に読んでない者がいるとは思いませんでした。

「心が弱いかたのご参加は、最初からご遠慮をお願い申し上げます。ご覧の通り本物の鬼に攫われて、地上に帰れなくなる危険すらあります。地上の生ぬるい肝試しと一緒に考えていただいては困るのです」

何人かのお客様が、目をそらすのが見えました。

「これ以上の恐怖体験を望まぬならば、引き返すことをお勧めいたします。誰も笑いませんし、責めもしません。引き返さないなら地上では体験することのまずかなわらない、刺激的な旅程を皆様に提供させていただきますわ」

§

生きてるうちに一度は行きたい！

地霊殿ツアー＋旧地獄めぐりの旅

秘境だらけの幻想郷からすぐ行ける新たな異郷として人気の旧地獄。

この世の者とも思えない景色や、ひと味もふた味も違うスリルが皆様をお待ちしております。

※古明地観光では恵まれない動物たちのために住処と食料を提供する目的にのみ、皆様の旅費を使用させていただいております。ご理解ご協力のほど何卒よろしくお願いいたします。

また、極端に健康が優れないかた、精神力が弱すぎるかた、欲望の強すぎるかたの参加をお断りさせていただく場合がございます。ご了承ください。

天狗が雑誌なるものを出すと聞いたのは、半年か、一年くらい前だったでしょうか。ほんの酔狂で、そんな広告文を出しました。

そもそも地霊殿は広大ながら、たいへん上手に維持できております。お燐お空を始めとする妖化したペットたちと、怨霊どもから搾り取った希少鉱石とのおかげです。よって、さらなる収益を得る必要はあまりないのです。万が一儲けが出たら、ペットの餌代くらいにはなりませんので嘘は言ってませんよ？ ただ、地底には恐ろしいものが潜んでいることを、人間たちには時おり思い出していたきたかったのです。天狗への原稿は、お燐に送らせました。

しかしその雑誌は、出版目前にして企画倒れとなってしまうました。当然、広告も闇の中へ消えるはずでした。しかしあるうことか、寄稿した広告が外部に流出したようなのです。天狗が私たちに会うはずなので、真相は不明のままですが。

それをどこで見たのか、本当に地底まで来てしまった酔狂者がいたのです。そいつは奇跡的にも幻想風穴を無傷ですり抜け、勇儀に絡まれておりました。

本当に客が来るとは思っていなかったものですから、準備などしていようはずがありません。手ぶらで返すのもなんですので、適当にもてなしてからお空に地上へ送らせました。それが、どうも気に入られてしまったようでした。噂が噂を呼んで、その後も地底を目指す者があとを絶たなくなっていました。

それで、どうにも幕を引けなくなってしまうのです。

私たちは手探りで地獄めぐりのプランを整え始めました。地霊殿まで安全にお客様をお迎える方法、人間が喜ぶもてなし、スリルを感じる旧地獄の史跡などなど。運良く通りすがりの外来人の協力が得られました。そのかたの監修で、敷地内に旅行者専用の建屋を増設しました。母屋も十分広いのですが、獣臭さを嫌うかたもおられますから。

ツアーは予想外の好評が続いています。地獄の恐ろしさを生きたまま味わえる、というのが信心深い人間たちにヒットしたのでしょうか。中にはサトリ妖怪である私をぜひとも出し抜いてみたいなどという、奇特なかたもおりました。今のところ全員返り討ちにしておりませんが。

あまりに好評のため、ペットたちだけでは彼らをさばききれなくなってしまうました。今や旧地獄の妖怪たちを一時的に雇い入れて、お客様に対応しているというありさまです。

これが来客皆無を謳われた地霊殿に、人間が出入りしている都合のいい理由でした。

§

母屋に隣接するお客様専用離れは、外界の旅館を参考にして、鬼に造ってもらったものです。広縁と床の間がついた六畳間の客室が三十。母屋から温泉を引き、大露天風呂も備えました。それから卓球台とかいうものを備えた遊技場も。なんに使うのかは監修者の心を読んでよく

わかりませんが、重要らしいです。

一階には、食堂も兼ねた大広間がありました。広さ三十畳ほどで、舞台も設けてあります。そこではお囃子が響き渡り、新たなお客様に対する歓迎の宴の真つ最中でした。

「そりゃっ！」

黒谷^{くろたに}ヤマメが威勢のいい掛け声を発しますと、蜘蛛の糸が八方に飛び散ります。まさに打ち上げ花火のような鮮やかさ。集まったお客様たちも手を動かすのを忘れて、ヤマメの糸芸に見入っております。

しかし演目の見せ場はここからです。ヤマメは蜘蛛の糸をより集めると、一本の縄を即席でこさえました。そいつを鞭のように振るうと、向かった先は舞台の片隅に積まれた角材の山。糸で絡め取ると、自らの手足のように角材を組み上げていきます。五分も経たず舞台の中央に槽が組み上がりました。

「ほいさー！」

ヤマメが槽の上に飛び乗っても、びくともしません。一本の釘も打たれた様子がありません。お客様がたからも驚きの声が上がります。

ヤマメは槽から新たな糸を垂らし、するすると降り立ちました。

「さあ、こいつはお釈迦さんが地獄に落ちた罪人を救うために極楽から垂らしたという、由緒正しき蜘蛛の糸だ。見ての通りの頑丈さで、鬼が引つ張ったって千切れない。誰かこの中に、

こいつの強さを試してみたい剛の者はいるかい？」

ヤマメがお客様たちに呼びかけましても、みんな尻込みいたします。そんな中、一人の男が意を決したように手を挙げました。

「じゃ、じゃ俺が」

舞台上が上がってきた男は、それなりに腕自慢のようです。筋骨も他の人間に比べたら大したものでした。ヤマメはにんまり笑って、男に蜘蛛の糸を差し出します。

「よし。では糸の片端を持って、押すなり引くなりやってみな」

男は糸を渡されながら舞台の片隅に置かれたものに目を止めて、声を上げかけました。一丈四方ほどの水槽です。中には毒々しい赤い色をした水が溜まっており、男はひとまず自己に關係ないことだと思ひ直して、糸をしつかり握りしめました。

ですが鬼が引いても切れないという触れ込みは、伊達ではありません。男が腕に青筋立てて引つ張ったって、糸はきしみすらも上げないのです。

「本当に切れねえ。って、あれれ」

糸にだいぶん気をとられていたのでしょう。男の体にはいつの間にか、糸の残りが巻きついておりました。慌てて解こうとします。しかしヤマメが糸の片端を引くだけで、糸は男の体をごんじがらめに縛りつけてしまいました。

男が面食らっている隙に、ヤマメは再び櫓の上によじ登りました。

「男一人をぶら下げたって、これこの通り」

ヤマメが糸をぐいと引つ張ると、男はなすすべもなく櫓のほうへ引つ張られていきます。こう見えてヤマメはなかなかの怪力なのです。

「ちよ、やめ」

あえなく男は、櫓の欄干からぶら下げられてしまいました。そこへペットたちの手によって運び込まれたのが、例の水槽です。どういう理屈か、泡立っております。

それが、男の真下に運び込まれました。簡易血の池というわけです。

男はもがきますが、そこは頑丈な糸です。

「ちよ、冗談だろ!？」

「お前が腐った罪人なら、冗談ではなくなるよ。あんたちよいとでも、ほかの人間にいいところ見せようって色気でもあったんじゃないのかい？」

「そ、そんなわけあるか」

「ちなみにそのプールに入ってるのは、血の池地獄跡から汲んできた本物だから」

「うええ!？」

糸ががずり下がります。毒々しい赤色と鉄の匂いが、男の鼻先にまで迫りました。

そこでヤマメは正面を向きまして。

「さて、次の出し物行ってみようか」

「ちょっと、こっちは!？」

§

離れがどんちゃん騒ぎに湧いているのと同じころ、私はといえば地霊殿の中庭に設けた東屋^{ガゼボ}で、とある妖怪と顔を合わせているところでした。

「はい、これが今回の通行記録よ」

水橋^{みずはし}バルスイがそう言つて差し出したのは、一冊の帳簿でした。風穴と旧地獄を隔てる橋、その通行記録です。三途の支流ともされる川は、向こう岸が見えないくらいに川幅があります。流れも急で、普通の人間ならばバルスイが番人を務める橋を渡る以外にありません。

私はその帳簿と、地霊殿の来客リストを軽く読み合わせました。

「今回も欠員なしのようですねによりです。偽装なんかしてないって? こちらでも人数確認はしておりますから、余計な猜疑など抱く必要もありませんわ」

しかしながらバルスイは、不機嫌を隠すそぶりすらありませんでした。

「実際、何人か『食べて』も問題はないと思っけどねえ。生きてる喜びを実感できるわ」

「彼らが生きて恐怖を地上に持ち帰つてこそ、この観光業を続ける意味があります」

私はすげなく返して、書類を畳みました。テーブルの上には、ティーセットが三つ。一人は

私の、もう一人は当然こいしのぶんでした。パルスイは立ったままです。

「ゆえに特別給金を配り、お客様に危害を加えないよう申し含めてあるのです。あなたといいはかの連中といい、隙あらば自分の巢に引つ張り込んでしまおうという魂胆が見え見えますが」
「まあね、稼ぎに見合う仕事はするわよ。気に食わない客がいたら連れ去ってもいいっていう、条件も加味した上でね」

と、そこで離れの中からヤマメが現れました。頬を最大限にゆるめた顔をしております。

「いやあ、今日もたんまりと脅かした」

「感染者は出てませんか？」

「いないと思うよ、たぶん。自殺志願とかでもなきや、そうそうかかるもんでもなし」

今のところお客様がたは、それなりに精神力が強めのかたばかりのようです。あんまり弱いとヤマメがばらまく瘴気で病に伏せてしまいますので。

「では公演が終わって早々で恐縮なのですが、キスメから搬送名簿を受け取ってきていただけますか？ 直接行ったら引きこもられましたので」

「ん？ ああ、その心配なら今日は無用のようだ」

ヤマメが岩天井を見上げ、手をかざしております。

「あら、自分から来たんですね」

私も顔を上げますと、旧都の向こう側から小さな影が飛んでくるところでした。それは長い

長い縄にぶら下がった、古ぼけた木桶でした。縄の先がどうなっているかは、誰も知りません。そいつは振り子みたく速さを増して近づいてくると、私たちの上をビュンと通り過ぎました。それからしばらくして、一枚の紙切れがひらひら舞い落ちてくるのが見えました。私はそれを地面に着く前に行つて取り上げます。

「別にとって食つたりはしませんよ？」

桶は地霊殿の屋根に降り立ちました。そこからゆっくりと、お下げ髪の娘が顔を出します。あれがキスメ。釣瓶落としです。地底への案内役を委託しております。

「たまにはお茶でも飲んでいつてはどうですか？ お菓子もありますわ」

遠くからでもよく見える程度に体を震わせました。桶ごと。しかししばらくすると。

「いない！」

それだけ言うと、再び飛び去ってしまいました。遠回りに帰るつもりなのでしょうか。

「清々しいほどの嫌いっぷりですね」

キスメの軌跡を見守る私の肩に、ヤマメの手が乗りました。

「あなたにや近づきたがらない妖怪のほうが、ずっと多いんだ。あの子を責めてくれるな」

「ま、いいですけどね。慣れてますし」

私はキスメの行方を追います。ああもう、こいしつたらなにをしているのかしら。

「あとで包みますから、あの子に持っていつてあげてくれませんか」

「よからう」

§

ところ変わりました、地上です。頃合いは、宵の口といったところでしょいか。忌まわしき太陽が沈み、地底と同じ闇が空を支配する時間帯です。

「というわけで、お姉ちゃんは目下うちを訪れる人間どもの対応でんやわんやになってて、私に全然構ってくれないの」

「それを私に愚痴って、なんになる」

どこの民家の屋根上に、お行儀悪く座り込む二人の妖怪がおります。一人はこいしでした。性懲りもなく、地上に出たのですね。もう一人があの子の友だち、というよりもこいしが一方的に絡んでるだけの面霊気、秦^{はたの}ころさんでありました。まだるっこしいので以後敬称は省かせていただきます。

頭に鬼の面をかぶって、無表情のままでした。

「地底旅行がブームになるなんて、世の中にながわかんないものよね。地獄観光なんて、死んだあとに思う存分楽しめばいいのに」

「しょーもない愚痴に付き合わされてる私は、現在進行形で地獄を味わっているわけだが」

しかしこいしは、まるでこのろの話聞いておりません。

「お姉ちゃんには全力で私を楽しませる義務があるわ。いつも家の中に引きこもっているんだもの。それくらいするのは当然だと思わない？」

このろは大飛出の面を頭にかぶって、こいしを見つめます。

「お前は、姉を奪った人間たちに嫉妬でもしているのか」

「あら、パルスィに悪さでもされたのかしら」

珍しく反応がありましたね。このろは身を乗り出して言葉を続けます。

「姉の興味を引きたいのであれば、地上をふらつくの早々に切り上げて家族のところへ戻ることだな。明確な血縁というものを持たん私から言わせれば、血のつながりとは相当に特別なものに見える。大事にできるものならば」

「ねえ、あの子いったいなにをしてるのかしらね」

「ちったあ人の話を聞きやがれ」

一瞬だけ、このろの面が鬼に切り替わりました。つられてこいしが指さす方向を見てみます。すると、提灯がこちらに向けて歩いてくるのが見えました。二人連れです。提灯を持っているのは若い男ですね。着流しに巻いた帯や羽織などに、さり気なくいい生地を使っております。それに腕を巻きつけて歩いてるのは、人參色の髪の手を持つ娘でした。

このろの面が猿に代わります。

「なんの変哲もない人間の番いではないか。あれがどうしたと」

と、振り返ってみるとこいしの姿はもはやどこにもありません。あの子だったら、地上の妖怪相手でも似たような感じなのですね。

こころの面が女に切り替わりまして、肩をすくめて夜空を見上げました。

「行つたか。いつも身勝手なやつだ」

改めて眼下を通り過ぎる二人連れに目をやります。彼女が注意を向けたのは、なれなれしくしている女のほうでした。

「どっかで見覚えがあるね。あれは人間に扮しているが、いつぞや騒動を起こした疫病神ではなかったか。新しいカモを見つけたということだな。あの男も災難だね」

ひとりごちながら、通り過ぎるのをただ眺めていました。疫病神の「仕事」に邪魔を入れようなど、野暮もいところ。男のほうにも隙があつたのかもしれないしね。

ただ、つい先ほどまで話していたやつのは、そうじゃないようです。「あいつも新しい玩具を見つけたか。楽しそうだなによりなことだ」

8

場所は代わりまして幻想風穴です。ここは地上と旧地獄をつなぐ、今のところ唯一の通り道

でした。キスメやヤマメは、この暗い竪穴の途中に居を構えておりました。不用意に地上から落ちてくる者を仕留める役回りもございます。

ヤマメはその風穴を、巧みに糸を操つてするりと登っていききました。途中にある自分の家を通り過ぎて、もう少し上にあるキスメの自宅へと向かいます。岩場の一つに少し傾いた木戸が取りつけられております。そこにたどたどしい字で「キスメ」と表札がありました。

ヤマメは糸を手繰つて岩場に降り立ちます。片手に袋を抱えて、木戸をコツコツやりました。「キッシー、いるかい？ 入っていいかな」

ほどなくして、なにかをゴロゴロ転がす音が木戸の奥から聞こえてまいりました。門が動く音がして、わずかに開いた扉からじつとりとした目が外の様子をうかがってきます。

「どうぞ」

ようやくしつかり扉が開きました。ヤマメは手にした包み紙を、キスメに見せびらかします。「さとりから日当と菓子をしめてやったんだ。一緒に食べよう」

「準備するから、少し待ってて」

キスメは桶の中へと引つ込みますと、そのまま勢いをつけて桶を横に倒しました。そうして転がりながら家の奥に向かいます。桶の外に出られないわけではないのです。ただ、こうしていたほうがとても落ち着くのだとか。

ヤマメは中に上がり込みますと、茶の間に腰かけて家の様子を見回しました。風穴の途中に

できた横穴を住処とした、ヤマメが立ち上がれないほどの茶の間です。むき出しの岩肌をどうにか整え、そこに畳を敷いて暮らしています。畳はだいぶんささくれ立っており、畳床がむき出しになっているところまであります。桶に入ったまま行き来を繰り返してのせいでしょうか。ふっと息を吐き出しまして、今度は茶の間の奥に目をやりました。小さな文机が一つ置いてある程度の、簡単な書斎です。机には、さらにポロポロの板が立てかけてあります。そこには一枚の紙が、画鋏で留めてありました。

元は新聞紙であったようです。その文字は白くかすれて、読めるかどうか怪しいものです。しかしかたわらにあるいちばん大きな見出しは辛うじて「文々。新聞」と読めました。

隣に写真が載っているのも、なんとかわかります。写真の中心にいるのは、キスメでした。井戸から身を乗り出し歯をむき出して、しゃれこうべを投げつけているように見えます。

「記念写真もだいぶほろくなってきたねえ」

「やめて。恥ずかしいから」

キスメが一飛びに戻ってまいりました。鉄瓶と茶葉缶が乗った盆を一つ抱えております。

ヤマメは勢いよくやってくる盆を、キスメごと支えました。鉄瓶が傾きそうになるところを、どうにかバランスをとって押さえます。

「天狗にさ。もっかいネガを探せないか、頼んでみようか？ 写真だけでも焼き増ししてもらえりゃ、もう何年かは鑑賞できるんじゃないか」

「いいって。また新しいの撮ってもらえるように頑張るから」

「そいつもまた、いつになるやら」

ヤマメはそこで言葉を切ると、茶の湯を入れるキスメを見守ります。桶からいっばいに身を乗り出して、時おり手を滑らせそうになっておりました。

「まあ、今こそ大チャンスじゃないか。どうだい、観光客の出迎えにはもう慣れた？」

茶の湯をチヨロチヨロと注ぎ込む音が、狭い岩穴の中に響きました。

「舌噛みそう。人間の目もいっばいあるから、まだ怖い」

「だが、みんなお前さんを見て怖がってくれるだろう？」

キスメはしばらくの間、湯呑みに注いだ水面の高さを交互に眺めます。

「ちよっと、楽しい」

「だろ？ いい機会だし、思う存分に顔を売っておきな。そしたら天狗もまた、新しい写真を撮ってくれるかもしれないよ。さとりから給金も出るし、こんな稼ぎ時はそうそうないさ」

キスメはヤマメに湯呑みを差し出し、頷きました。

「そうだね。頑張る」

そんな妖怪たちの頑張りに関わらず、私は珍しくも忙を極めておりました。ペットたちには普段の仕事に加えて、お客様の世話もお願ひしております。みんなは家事作業の延長と、笑い飛ばしているところです。しかし、私も自室の書類作業ばかりというわけにはまいりません。こういうときにこそ、こいしにも手伝ってもらいたいのですけれども。

「ずいぶん楽しそうですね？」

歩く私の隣にお憐が肩を並べます。胸元の第三の目で、彼女を眺めました。死体の代わりに毛布やシーツを満載した猫車を押ししております。

「さとり様のことだから忙しくなるのをすごい面倒くさがると思った、ですか？」

「いや、實際腰は重いじゃないですか。なのに今回に関してはえらいアクティブですよ？」

そりゃあ普段の仕事が、とるに足らない怨霊のわがままを聞くことですから。今回のとは、わけが違います。

「地霊殿にこれほど来客があることなんて、あとにも先にも今しかないだろうし。これは大いに張り切るべき機会だと思うわ。人間の恐怖を直食いできる機会なんて、滅多に訪れないもの」「まあ、確かに。こいし様を探しに行く以外でも外出りゃいいんですよ」

お憐の要求はさらっとスルーすることにいたしました。

「接待のリソースは存分にあるし、多少の不満は読めてしまおうし、接客業って自分でも思った以上に天職なのかもしれないわ。この際綺麗な女将として来客に接し、存分に人間たちの心を

のぞかせていただこうかしらね」

お憐が私の顔を目を細めてにらみます。なんですか「大丈夫かなあ」って。

「まあ、ほどほどにお願いしますよ？ 調子乗ってるときほど悪いことは起きやすいですから」

「そうそう悪いことなど、起こってたまるものですか」

と、リネン室の前にたどり着きました。ここでお憐とはお別れです。私は手に抱えた書類を書庫まで運びませんと。

さて地霊殿といえは、広大な敷地に建てられた巨大な屋敷で有名です。書庫もそれに応じた広さがございます。私個人の蔵書に加えて、ペット初等教育用の児童書、動物飼育の指南書、ペット個人が持ち寄った私物の本など。しかし中身の大半は、日々のジャーナルで占められております。飼育記録、怨霊の状態の記録、庭園の育成記録、その他もろもろ。そうしたものの蓄積が、地霊殿の運営を支えていると言っても過言ではありません。

しかしその書庫はエントランスを挟んで自室の反対側となります。少し歩く羽目になるのは不便ですね。改装しようにも膨大な蔵書がありますので、その対応で二の足を踏んでおります。思えばもう少し、早めの決断をしていればよかったです。

エントランスから、何匹かの小ペットが逃げてくるのが見えました。第三の眼は、いやが応にも厄介ごとが巻き起こったことを読み取ってしまいます。

歩調を早めてエントランスに向かいます。そこは本来、多くのペットがくつろぐ空間でした。

今は獣の輪ができております。その中心に一人の人間、一人の獣がいました。

人間のほうは、先日ペットを眺めていたお客様の一人ですね。それを血走った目で威嚇しているのは、飼っている地獄タイガーの一头。機嫌を悪くすると厄介なやつです。

「あなた、この子になにをしたのですか」

「な、なにもしてない！」

はい、なにかした人の常套句ですね。肝試しに軽く触れましたか。彼は繊細だというのに。事前に説明もしているはずなのですが。

相当やばい状態です。言いつけを守らなかつたら、たとえお客様でも自業自得です。しかし血を流しているのが、少々厄介です。人間の血を覚えたタイガーが、彼を食い殺したあとも理性を保っていられますかどうか。

困ったことは、もう一つ。助けを呼んでいる暇が、まるでありません。

タイガーが、咆哮一つ上げました。私はもう、書類を放り出して走り出していました。

お客様に向けて飛びかかったタイガーの前に、私は飛び出しました。

§

場面は再び、宵の人里です。

人通りのなくなつた路地に、誰か駆け込んでまいりました。こいしとこころが屋根の上から見ていた、あの娘ですね。

「くそつ、あの女どこ行きやがつた。この俺の懐を狙おうなんて」

ひどい劍幕の男の声が表通りから聞こえ、通り過ぎていきました。女は手で口を押さえて、剃刀みたいな目をして声が遠ざかるのを待ち構えます。

女は息と一緒に大きな舌打ちを吐き出しました。リボンを取り出し髪を左右にまとめますと、髪の手がひとりでに螺旋を描きます。

「つたく、どういうつもりよ」

「どうもこうも」

すぐさま女の指に、キラキラ光る指輪が現れました。その指で拳を作ると、隣に現れた影に向けて打ち放ちます。パチンと風音が鳴りました。

当たれば痛いであろう指輪つきの拳が、こいしの髪をかすめました。

「危ないなあ」

「私から言わせれば、あんたのほうがよっぽどだわ」

こいしが千鳥のような足運びで、女から離れます。その隙に女ことよりかみじよおん依神女苑は、どこからともなく取り出したケバケバしい紫色のコートを両肩に羽織るのでした。

拳をもう一方の手のひらに押し付け、こいしをにらみます。

「あなた、なんてことしてくれんの。せっかく見つけたあのどら息子、近づくまでがたいへんだったのよ？ それを一瞬でふいにしてくれちゃって」

「んー、あなたを見ていたら、一つ思い出したことがあってねえ。ほら、この前の異変。私、あなたたちにこっぴどくやられたじゃない？」

仔細は省きますが、女苑とはある異変の首謀者でした。伝聞の伝聞によると、博麗の巫女にやられるまではまるで負けなしかったそうです。

「結局退治されたし、騒ぎを起こした精算も終わってる。仕返しをされるいわれはないわ」

「それはあなたたち内輪にとつては、終わったというだけの話。だけれど巻き添えを食らったほうにとつては、そうじゃないんじゃないかしら？」

女苑の頭に、シルクハットとサングラスが飛び乗りました。

「どうあっても、やろうというのね？ 返り討ちにしてやるわ」

言うや身をかがめて、電光を追い越す速さでこいしの眼前に詰め寄りました。一発二発と、拳が飛びます。しかしこいしは、風に流される花のような動きでそれらをあしらいました。

「ふふふ、慌てないほうがいいわ。あなた一人だと全然弱そうだし」

「言ったな、テメエ！」

青筋を立てて女苑が投げつけたものは、いずこから現れたハンドバックでした。こいしはそれをも、難なくかわします。

「それに、こんな人里の中で騒ぎを起こすのは、あなたにとつてもまずいんじゃない？ ほら」と、こいしは女苑に人差し指を向けました。びくりと震えて、うしろを見ます。

女苑の背後には、人気のない路地が続くばかりでした。

「ちよつと、びつくりさすんじゃないわよ」

前を向き直ります。しかしそこにはもう、こいしの姿がありませんでした。目を見開き上下左右を探しますが、気配すら見つけることもありません。

「忍者か、あの女。ふざけたやつだわ」

女苑は歩き出しました。じつとしていたら、どら息子に見つからないとも限りませんしね。小さな声で、こいしに對する呪いの言葉を並べ立てます。

「あいつ、どう仕返ししてくれようかしらね。無視する？ いやいや、これからもちよつかいを出され続けたら疫病神の商売上がったりだわ。なんとしても黙らせなくちゃ。あいつなんと言ったかしら。憑依異変のときは、白黒魔法使いとコンピを組んでたやつだ。古明地こいし、だっけ？ 古明地。うーん、どっかで聞いたことがあるわね」

ドリルみたいなお下げ髪を、指でもてあそびます。

「思い出したわ、古明地観光。あのふざけたツアーの関係者か。地底といや厄介な妖怪ばかりで有名なところよね。私一応神だし妖怪同士の取り決めとかどうでもいいけど」

はた、と女苑の足取りが一瞬だけ止まります。

「そうだ、地底だよ。金持ちで有名な場所じゃないよ。あいつら金稼ぎする必要ないくせに、なんで観光業なんかに手を出したんだよ」

まあ、こちらにもやむにやまれぬ事情ってものがございます。

「連中なら、いくらむしってやっても誰も困らなさそうね。よし、次の標的は地底妖怪だ！
まずは連中にどこまでつけ入る隙があるか、きちんと調べないと」
足を早めた女苑が、路地の暗闇に消えていきました。

§

さて、地霊殿に戻りましょう。

薄暗い我が館の廊下に、一人の娘がおりました。くせの多い髪の毛、フレームが太い眼鏡、チエック柄のベストとスカートの娘です。その場で前後左右をしきりに見回しております。

「どこかしら、ここ。なんとなく見覚えがあるな。えっと、地霊殿、だっけ？」

お察しのかたは多いでしょうが、娘の名は宇佐見童子^{うさみすみれこ}。眠っているときだけ幻想郷にやって来てしまう、奇特的な病気を持った外来人です。我が旅館の「監修者」でもありません。

「レイムッチには立ち寄るなって言われてんだけどなー。出てくる場所は選べないからなあ」
童子は出口を探して、足早に歩き始めました。とはいえ地霊殿は母屋だけでも広大ですし、

ペットも数多くおります。誰にも見つからず抜け出すのは、かなりの難易度でしょうね。

さらに言えば、今の地霊殿には面倒な連中も巢食っております。怨霊じゃないですよ。

そいつは不意に董子の前へ、重苦しい音を立てて立ちはだかりました。

「なんだあ、お前。人間かあ？」

董子はそいつを見上げて立ち尽くします。頭三つほど抜け出た体格。頭から伸びる一對の角。どこから見ても鬼にしか見えませんし、実際その通りでした。

「ふん。お前はなんだ、旅館の客か？今は見学の時間から外れてると聞いたぞ」

「旅館？ああ、本当に始めちゃったんだ」

口の片一方を吊り上げながら、鬼が董子に詰め寄ります。思わず後ずさりです。

「命が惜しかったら今のうちに逃げ帰れよ、人間。この館はなあ」

「私の館ですよ」

と、そこで私の登場です。背後に董子をかばって、鬼の前に立ちふさがりました。

「このかたは私のお客様です。みだりな示威行動はお控えくださいませ」

鬼はしばらく、私の姿を見下ろしておりました。ふん、と一つ鼻息を鳴らします。

それだけでした。鬼は踵を返し、立ち去っていききました。

何考えてんでしようね、あれ。

「どうしちゃったの、その怪我」

董子が、私の顔を覗き見ておりました。はい、今の私は怪我をしております。顔の右半分に包帯を巻き、左足を松葉杖で支えるという体たらく。しかもサトリ妖怪にとつてのいちばんの武器、第三の眼まで包帯がぐるぐる巻きになっております。

「元気な子がいて、ちよいとしくじりました。ひとまず私の部屋までどうぞ。しばらくは戻れないのでしょうか？」

私は董子連れて、自分の部屋へ向かいました。その間、多くの鬼とすれ違います。通路に座り込んで酒盛りをする者、館の隅々を採寸している者、場所によつては敷布を壁や床に張り巡らせて勝手に館の補修をしている者までおります。もちろん、一切依頼などしておりません。道すがら、董子が私に尋ねました。

「なんなの、あれ」

「私が死にそうにしてるのを嗅ぎつけて、館を乗っ取ろうとお考えの連中ですわ」

「乗っ取り？ 穏やかじゃないわね」

「まったくです。どこから話が漏れたのやら」

普段は地霊殿へ近づきもしないくせに、こんなときばかり敏感なやつらです。ちなみに地獄タイガーは運良く我に返りました。今は飼い主に怪我させたショックで自主謹慎しております。

董子は私の第三の眼にも視線をやりました。

「まさかそれ、使えないの」

「読めないことはないんですが、ノイズがひどくてまるで使いものにならないんですよ。ほつ
といてもこういう怪我はすぐ治るんですが、今回に限っては遅々としたもので」

第三の眼はサトリ妖怪にとつて、心臓なみに重要な器官です。心が読めないとなれば、私の
強みは九割九分失われたようなもの。怪我の治りが遅くなるわけです。

もつとも、こいしみたいな例外もおりますが。あの子ったら、まだ帰ってこないのかしら。
そんな話をしてるうちに、私の部屋へとたどり着きました。さすがに、ここまで鬼が踏み
入って来ることはありません。

「お茶を入れますね。目が覚めるまで、ゆっくりしてお行きなさい」
「どうも」

私が準備を進める間、董子は所在なく部屋を見回しておりました。机の上に散らかしてあつ
たお客様の台帳にも目をやります。

「噂には聞いていたけど、まさか本当に旅館を始めるなんてねえ」

「あなたが最初にこちらを訪れたあと、ほどなくして。こいし、お客様ですよ。いるならきち
んとあいさつなさい？ スマホ泥棒の件も、きちんと謝っていいのですから」

三人ぶんのティーセットを、ワゴンに乗せて戻ります。董子は私に少しだけ引きつった顔
を見せておりました。

「こいしちゃん、帰ってきてるの？」

「その反応はいささか不満ですね。十回に一度くらいは本当にいますよ」

幸い両手は使えますので、童子に紅茶を淹れるくらいはできました。ティーカップを三つ、テーブルに並べます。途中で帰ってくることも、たまにはありますので。

「この前童子さんに見せていただいたイメージをもとに、旅館の建屋を造ってもらいました。いい具合に真似できたと思うのですが。あとで案内してあげますね」

「いや、私も修学旅行で行った程度しかないわよ？　うろ覚えもいいところだし。そもそも、よくお客さんがここまで来るようになったね？」

「そこら辺を読むのは、私にも難しいところでした。話せば長くなるのですが」

いささか急いだ感じのノックが聞こえたのは、そのときでした。残念ながら、このお行儀のよさはこいしのものではないようです。

「お入りなさい」

勢いよく、扉が開かれます。顔を出したのは、家事担当ペットが二人ほど。

「失礼いたしますさとり様、トラブルです！」

聞かや私は、立ち上がりました。せっかく淹れたたの紅茶が台無しです。

「あら、たいへん。仔細は？　今は心が読めないから、できる限り事細かにお願いね」

「鬼どもと掃除担当が小競り合いを。お隣さんに出てもらっています、かなりまずいです」
ついに始まってしまったようです。連中の傍若無人を踏まえれば、時間の問題でした。

足を引きずる私に、董子が声をかけました。

「鬼と戦いになるのかしら？」

「そうならないことを期待してはいますが、まあ難しいでしょうね」

こういうときこそこいしにことを収めてもらいたいのですが、戻ってきておりません。私はペットたちの助けも借りて、喧騒の場に急ぎました。なにやら董子も着いてきています。

エントランスでは鬼の一人と、ペットたちが向かい合っておりまして。お隣が先頭に立って、鬼の相手をしております。

「調子に乗るんじゃないぞ、畜生どもめ！」

「聞き捨てならないね、お兄さん。うちの子たちはさとり様のために、ここいらを綺麗見事に掃除して差し上げるのがお勤めなんだ。用心棒だなんだと口実をつけて勝手に居座るやつは、邪魔者扱いされても仕方がないんだよ？」

お隣もだいふんとぼしております。先に手を上げたとなれば、追いつく口実には十分でした。ところが対する鬼のほうも、煽る知性くらいはおありのようです。

「だったら、ここいらの犬猫どもを追い払えばいい。獣臭いのが何匹か減りゃあ、掃除の必要などなくなるだろうよ」

「できるわけなからう。さとり様の心を慰めるのも仕事のうちさ」

「さつきからさとり様さとり様と、うるせえ女だ。心を読めねえでくの坊のサトリ妖怪なぞに、

義理立てをしてなんになる？」

「あたいらの忠誠がその程度のことでは揺らぐもんかい」

「そこまでです、お隣」

そこでようやく、私は二人の間に割り込むことができました。

「無駄にことを構えてはなりません。怪我などしたらどうするのですか」

「ですが、さとり様」

「野蛮な鬼に館を蹂躪されるよりも、あなたを失うほうが館にとつてはより大きな損失です。いいからここは矛先を収めなさい。これとは私が話をつけますから」

シャツを威勢良く引つ張り上げられました。あつという間に地面から足が離れます。お隣が目をむいて使い魔たちを呼び出すのが見えました。すぐにうしろを向かされてしまいました。鬼の赤黒い顔が私を見上げております。

「野蛮呼ばわりするわもの呼ばわりするわ、ずいぶんとごあいさつだな古明地さんよ」

「あら、手をお出しになる？ 私を殺したらなにが起こるのか、北の区長様からお聞きになつていらっしやらないのかしら」

ひとえに鬼と申しましても、地獄獄吏上がりの荒くれ者、地上でさんざ暴虐を働いたならず者などの集団です。一枚岩というわけではありません。鬼の四天王の下には旧都の東西南北の街区ごとに、顔役の区長がおります。それぞれが多くの鬼を従えて、絶えず派閥争いを繰り広

げていました。止めようにも、今は勇儀を除く全ての四天王が出払っております。残る勇儀もいちいち手出しをせず、争うに任せるといふありさまでした。

「聞かないでか。無論知つてるとも、大戦争よ。地底の覇権は俺たちがいただく」

「残念ながら、あなたは話半分にししか聞いていないようですねえ」

「なんだと？」

私はこの無知蒙昧なる鬼に、指を立てて説明して差し上げました。

「地霊殿の主人が死ねば、後釜をめぐって地底の派閥抗争が始まる。そこまでは確かに正しい。しかし、それは普段の殴り合いごときでは収まりません。起こるのは、本物の殺し合いですわ。あなたが私を殺せば、その口火を切ることになる。その覚悟はおありでして？」

なにに、やくざの抗争？ みたいな声が聞こえましたが、無視することにいたしました。

「面白じゃねえか。こちとらしい加減退屈してんだ。毎日毎日両隣の街区とにらみ合いの繰り返しをしなくて済むとなりや、せいせいするぜ」

「左様でございますか。でも、その大喧嘩にあなたが加わることは恐らく永久にありません」

「なにを？」

私は背中になかな熱を感じ取りました。

「私を殺せば、少なくともあなただけは完膚なきまで焼き尽くすからです。私のペットたちが」
鬼が口を引きつらせるのが見えました。彼の向きならよく見えているでしょうね？ お空が

人差し指を天に突き上げ、圧倒的な八咫鳥様の力、核融合の炎を生み出す様子が。

鬼の額に浮いた汗は、熱のせいだけではありますまい。

「役立たずになった主人の仇を、やつらが討つてのかわよ」

「その程度のことでは恩を忘れる、薄情者を飼った覚えはございませんよ」

「なら試してやろうか、ええ？」

肋骨がきしみを上げました。きやつときたら、私を開いたほうの手で鷲掴みにしたのです。

お隣のゾンビフェアリーたちが、弾丸を装填する音が聞こえました。視線をやって黙らせました。その人、スマホでこちらに向けるのを止めなさい。

「だいたい心が読めるというだけで、こんなお屋敷で踏ん返り返っていられるのが前々々から気に入らなかつたんだ。それがお前、今はただの弱々しい餓鬼でしかねえときた。なんで誰もやっちまわねえんだ。簡単なことじゃねえか」

「そのあとに起こる恐ろしいことを、誰もが避けているおかげです。さあ、試すといったのは口だけですか？　だとしたら、とんだ腰抜けですね。おまけに、嘘つきでもある」

鬼の顔に真っ赤な筋が、次々浮かび上がりました。お隣、よく見ておきなさいね。鬼を挑発するときにはいちばん効くのはやはりこれです。

「貴様、俺を嘘つき呼ばわりするか。ならばやってやる。テメエを怨霊どもの列に並べてやる」
鬼が今にも私を叩き壊さんと、片方の腕を振り上げます。動きを封じられた私はその様子を

笑顔で見上げていることしかできませんでした。骨がミシミシ言っております。怪我がひどくなったらどうしてきましょうか。

「死ねええええい！」

怒りに膨張した拳が、私の顔にゆっくりと近づいてまいりました。ああ、どうやら私もこの世からおさらばするようです。この非常時にこいしったら、どこでなにやってるんでしょう？ 鬼の拳はいよいよ私の目の前に迫ってきて、ついにその動きは完全に止まって見えるほどになりました。いや、よく見ると実際止まっております。少し首を傾げると、鬼も大きく目を見開いていました。腕をどんなに震わせても、動かないのです。

鬼の腕は、新たに現れた手が掴みとってありました。鬼が汗を流して、そちらを見ます。

「ほ、星熊の」

「よくぞ振り下ろした、と言いたいところだが。区長は少々しつけが足らんようだ」

勇儀は軽々と、鬼の腕をうしろに引き寄せます。自身より頭ふたつほど大柄な鬼の腕をです。おのずと後ろ手にさせられることになりました。私を握ったほうがゆるみ、私はようやく床へと下されたのです。

「少し頭を冷やすがいい」

私から見えたのは大口を開けた鬼の顔と足。直後に重いものが落ちる轟音が聞こえました。ペットたちに助け起こされます。見てみると、鬼はもはや勇儀によって、うつ伏せに組み伏せ

られているという具合になっていました。

勇儀は鬼の腕をつかんだまま、私に笑顔を向けます。

「嘘つきの汚名を着せることだけは、感心しないねえ」

「やりづらそうにしていたものですから」

「ともあれこいつらも、それぞれの上役の言いつけでこの場にいる。あまりいじめてやるな」

「かく言うあなたは、どうなのです」

勇儀は笑い顔のまま、なにも語ろうとしませんでした。

「まあ、よしとしましょう。しかし」

ペットたちの支えから、離れました。

「こちらもペットを愚弄されたままでは面目が立ちません。名誉回復の決闘を申し入れます」

ペットたちがざわめきました。前に出ようとすのお隣を、手を伸ばして遮ります。

その様子を見て、勇儀などは鼻で笑っているのです。

「半死半生のお前が、こいつら相手に弾幕ごっこか？」

「いいえ。決闘方法はこちらで選ばせていただきます」

組み伏せられた鬼が、齒を食いしばりながら顔を上げました。

「ふざけんな。決闘を仕掛けた側がやりかたを選ぶなんて、そんな理屈が通るか」

「その理屈をこれから通すのです。せつかくですから東西南の代表者もここへお呼びください。」

各区長に代わり、まとめてしつけて差し上げましょう」

ペットたちのどよめきが大きくなります。勇儀が私に尋ねました。

「なかなか、大きく出たねえ。いったいなにをしつけるつもりなのさ？」

「この脆弱なサトリ妖怪が、何ゆえに地霊殿の主人に居座ってられるか、その理由をです」
それから董子にも声をかけます。私たちが争ってる間、ずっとスマホをカシャカシャやっておりました。あれで写真機にもなるそうで、外の世界は便利になったものです。

「あなたも観戦していかれますか？」

「あー、申し訳ないけどそろそろ授業終わりそうなんで」

見ると、董子のうしろが透けておりました。外の董子がもうすぐ目覚めるようです。

「あら、残念。でもサボりはいけませんね」

「そう言えば一つ、思い出したことがあって」

半透明の霊体みたくなった董子が、天を見上げます。

「なんです、それ」

「やー、ちょっとものが手元にないんで。運がよかったらあとでお話ししますわー」

とか言っているうちに、董子の姿は完全に見えなくなってしまうました。次はいつの訪問になるのか、それは董子自身にすらわからないそうです。

「慌ただしい来客だったわ」

「さとり様、いったいなにで鬼と勝負なさるつもりなんです?」

お憐が私に聞いてきます。私は一思案して、彼女に言いました。

「あなたにも少し手伝ってもらおう対戦方式ですよ。そうだ、お客様に観戦してもらいましょう。希望者を連れておいでなさい」

§

同じころ、地上の人里に場面は移り変わります。

下町の片隅に、小さなお店がありました。店先の看板は鈴奈庵すずなあんと読めます。庵の文字が少々右に傾いておりましたが。

中は四方の壁が本棚で埋め尽くされております。奥まったところには、小さなカウンターがありました。そこでは店番の本居小鈴もとおりこすずがかたわらに蓄音機の音楽を鳴らしながら、本のページをめくっていたのです。

暖簾が揺れて、一人の女が入ってまいります。

「ごめん下さいな」

「はいはい、なんででしょう?」

小鈴は仕事柄でしょうか、来客の姿を上から下までさっと見渡しました。枯れ草色の着物を

着て、長い髪をうしろで一つに縛った女でした。

「あの、ここでは妖怪の本を扱ってるって聞いたんですけどー、地底の妖怪について詳しい本とかありますかー？」

「うーん、地底ですか。こと幻想郷の地底に限った話なら『幻想郷縁起』がいちばん詳しいと思います。お探しましょうか？」

「よろしくお願いします」

鈴奈庵は貸本屋です。本は人里の住民にとつては、まだまだ贅沢な品物であるようでした。そうした人たちに本を貸すのがこのお店の仕事でありました。しかし鈴奈庵は最近になって、私たちが書いた本、すなわち妖魔本を扱う店としても認知されるようになってきました。

妖魔本の多くは、私たちの言葉で書かれています。人間では読むことができないでしょう。そんな人間のための貸本屋であるところの鈴奈庵が妖魔本を扱えるのには、小鈴のとある能力が関係しておりました。

本棚を漁るかたわら、待ち構える女に小鈴は尋ねます。

「地底の妖怪に興味がおありなんですか？」

「あ、ほら、最近噂になつてるじゃないですか。生きながらにして地獄めぐりができるツアーがあるって。それで興味が出て来ちゃって」

「なるほど」

小鈴の耳にも届く程度には、地底旅行の噂は人里に広がっておりまして。人里の外れにいる怪しげな販売所で、地底行きのチケットを買うことができる、とも。

ちなみに値段は子どもの小遣いで買えるものから、高級料亭に芸者を呼んで数日豪遊してもまだ足りないものまでございます。あまり安いものは自殺志願でもない限り、買わないほうがよいと申し伝えることになっておりますが。

「はい、こちら幻想郷縁起になります」
「ありがたい。ここで読ませていただいてもよろしいですか」

幻想郷縁起は人里の名士である稗田家が編纂している、幻想郷の風土記のような本でした。幻想郷の危険な地域や妖怪などを、人間の言葉で説いたものとなっております。

店の中には借りた本をその場で読めるように、ソファがあつらえてありました。女はそちらに座り、幻想郷縁起のページをめくります。

小鈴もまたカウンターに戻って、本の続きを読み始めました。しかし紙面の先に女の様子をちらちらうかがいながら。まあ、初めてのお客様でしたし。妖怪に興味を示し鈴奈庵にやってくる者も、まだまだ珍しいものでした。

「ちっ」

小鈴は心臓の跳ね上がるような思いをしました。音楽にまぎれて、そんな舌打ちの音が聞こえたような気がしたのです。ページをめくりながら、その向こうにいる女の様子を見守ります。

女の表情は特に変わり映えないように見えました。気のせいかとも思える程度に。

それからしばらくして、女が幻想郷縁起を手にかウンターへ近寄ってまいりました。

「あの、これで全部ですか」

「え、ええ、恐らくは」

所在なさげに両の拳を握ります。女のいくぶん眉尻の下がった顔が見えました。

「なんとというか、物足りないものですね。地底の妖怪はほかのところと比べると、書いてあることが少ないような気がして」

「そうかしら？」

小鈴が瞬きをします。幻想郷縁起を読んだかたは、ほかにもいました。しかしこんな言われかたをしたのは、このお客様が初めてです。

「だいぶ最近になって書かれたみたいですけど、誰が書いたものなんです？」

「ええ、これは当代の御阿礼乙女が書いたものですよ。たぶん幻想郷について、これ以上に詳しい本はなかなかないかと」

言葉を尽くして女の表情をうかがいます。しかし首を傾げるなどして依然さえない様子です。

「そうなんですか。まあ、人里でわかることなんて、この程度なのかなあ」

と、女は幻想郷縁起の上に硬貨をいくらか置いて、小鈴に差し出します。

「あの、貸本代は結構ですよ？ 大した時間じゃありませんでしたし」

「いいのよ。私、なあなあで金銭授受がおろそかになるのは嫌いな性分なの。ありがとうございました。地獄めぐりの件でまたわかることがあったら、教えて下さいな」

「はいはい」

と、女は鈴奈庵をあとにしていきました。残された小鈴はしばらくの間、返してもらった幻想郷縁起を見下ろしたまま、カウンターに立ち尽くしていたのでした。

「物足りない、かあ」

§

さて、鈴奈庵から出てきた女のほうに目を向けてみましょうか。そいつはしばらく歩くと、人気のない物陰で髪を結び直しました。両脇で結んだ髪が、くるくると螺旋を描きます。と、ここまで書けば正体については察しがつきますでしょうか？

「うーん。所詮は人間の収集した情報なんてあの程度よね。となると、直接に行って見聞するしかないのかしら。しかし、知らなかったわ。古明地こいしがサトリ妖怪だったなんて」

女こと女苑がつい舌打ちを鳴らしてしまったのが、まさしくこいしと私の記述を読んだときでした。まあ、初見であの子をサトリ妖怪だとわかるほうが珍しいでしょうね。

ご覧の通り女苑は人間のふりをして標的に近づき、富を奪うというのがいつものやり口です。

普段の私が相手となれば、まあ、相手にもならないでしょうね。

「圧倒的に分が悪いわ。しかも対策が『近づかないこと』だった？ それが簡単にできれば、誰もサトリ妖怪を怖がらないっての」

残念ながら、幻想郷縁起に書かれていたことはろくな内容ではありませんでした。地霊殿についても広大であること、ペットが大量に飼われていること程度の話しかありません。

「旅行客にまぎれたところで、心を読まれたらジ・エンドだわ。せめて、あいつが」

そこまで言って、天を見上げます。しばらくすると眉をしかめて、頬を両手ではたきました。「やめやめ。この場にはいやつのことをくよくよ考えてなんになる。一人でやってやるんだ。安全な場所から地底の、地霊殿の富を巻き上げる方法、きつと見つけ出してやるわ」
そうして女苑は、肩を怒らせ歩き出したのです。

§

さて、地霊殿に戻りましょうか。

エントランスホールは、鬼たちとの対決の場となっておりました。ペットたちを退去させ、代わりにアメーバのごとく流動する怨霊の群れがホールを埋めております。私たちはその中心に座っております。それがまさに、私が提案した決闘方法だったのです。

「があああっ！」

やみくもに、鬼の一人が立ち上がりました。腕を振り回してまとわりつく怨霊を払います。

「はい、西の代表アウトな」

勇儀は暴れる鬼の肩をつかむと、そのままホールの端へと引きずっていきました。その様子にホールの片隅から大きなどよめきが聞こえました。

「また一人脱落したぞ」

「そんなに怨霊とは恐ろしいものなのか」

そこには地霊殿の椅子を集めた、簡単な観客席が設けてありました。お客様がたが私たちの決闘を評して、話し合っております。お隣が観客席の前で、お客様たちに言いました。

「ここから足を踏み出さんように気をつけな。あんたたちも怨霊に憑かれちゃうからね」

「憑かれると、どうなるんです？」

「知らんのかい？ 心を病む。妖怪だろうと人間だろうと、最悪死ぬよ」

お客様たちのどよめきが大きくなります。

「さとりさんや鬼たちは、平気なのですか」

「あそこに集まっているのは東西南北、旧都の中でも選りすぐりの猛者どもさ。だからああして、耐えていられるんだと思ってくればいい」

「それじゃあ、さとりさんはいったい」

私は椅子に座らせていただき、怨霊のざれ言を聞き流しながらお茶の続きを楽しんでおりました。こいしも早く戻ってこないと、お茶の風味が落ちてしまいますよ。

「そりゃあ、うちの自慢の主人さね。でもって、怨霊以上のオバケだよ、あのかたは」

ちよいと誇らしい気分になりますね。オバケ呼ばわりは納得がいきませんが。

そうこうしてる間に南の代表が暴れ出しまして、勇儀に引きずっていかれます。東の代表はいのいちばんにリタイアしましたので、残った相手は北の代表ただ一人。ペットといざこざを起こしたあいつとの一騎打ちとなりました。

「ビッグマウスに違わずここまで耐えきったことに関しては、評価させていただきますわ」

北代表は私の言葉に笑いもしませんでした。タイルの上にあぐらをかき、赤ら顔をより赤くして、私の姿を睨みつけるばかりです。

「まったくふざけやがって。こんな勝負になんの意味があるってんだ」

「地霊殿の主人になるということは、同時にこれら怨霊たちを御する者になるということでもあります。この程度に耐えられないような者に、主人の座を譲るわけにはまいりませんね」

「うぬぬぬ」

うふふ、言い返せますまい。彼らはそのために地霊殿へと集ったようなものですから。

「手前はなんで心も読めねえのに、平気にしてやがるんだ。イカサマでもしてんじゃねえのか」
「全くの同条件ですよ。立会人も認めております。心が読めないからこそ、こいつらはいつも

以上に積極的ですよわ」

北代表が、間に立つ勇儀を見上げます。彼女は無情に頷くばかりでした。

「お、おのれ」

怨霊たちが、再三に渡ってまとわりついてまいます。北代表はそれでも歯を食いしばり、怨霊たちの攻勢に耐えておりました。

「こんな連中ごときにこの俺様が」

『そんなこと言わずに、こっち側へおいでよー』

『あんだだって呪いたいやつか。一人や二人、いるんじゃないのかーい？』
「ぐぬぬ、そんなわけがあるか」

うっかり相手にしてしまいましたか。そろそろ限界かもしれないですね。

『そろそろ心が折れそうかなー？ 俺、あなたに憑いちゃおうかなー』

「やれるもんなら、や、やってみやがれ」

『じゃあ遠慮なく』

怨霊は、ぬるりと鬼の頭に潜り込みました。実体がないのでやりたい放題ですわ。

対する鬼は、歯を食いしばっております。

『おお。いい隙間を見つけたぞ。これは好きだけ憑いていられそうぞ』

滝のような汗が流れ出しております。

『おい、ほかのやつも来てみるよ。一緒にこじ開けてやろうぜ』

顔にうどんでもかぶったかのような青筋が浮かび上がっております。

『そいつは面白い』『どれどれ』『私も憑きたーい』

『うおおおおお！』

駄目でした。半ば目の焦点を失いながら、腕を遮二無二振り回します。

「やめろお前ら、俺に憑こうとするんじゃないやねえええ！」

「はい、アウト」

がつん、とホールに金属音が響き渡りました。

北代表の脳天に、勇儀のかかとと鉄下駄が鎮座しております。彼は口をへの字に曲げ、勇儀に目をやったあと前のめりに倒れ伏しました。

勇儀は北代表の巨体を、肩に担ぎ上げます。

「さすがだな。この手の我慢比べでは、あんたの右に出るやつはいなさそうだ」

「その我慢比べのただ中で平然と審判役をしているかたが、なにをおっしゃいますやら」

勇儀は私の言葉になにも返さず、ただ静かな微笑みを浮かべるばかりでした。

「さあ、これにて決着。決闘はさとり様の勝利だ」

お憐が誇らしげに、お客様へ説いております。しかしながら、お客様は眉を互い違いにして腕を組んでおりました。今しがたの決闘を、ご覧になったというのに。

「ただ我慢強いただけなのでは？」

「いやまあ、それはそうなんだけど」

お客様たちが三々五々、ホールから出ていきます。

うーん、これは少々決闘としてあまりに地味すぎましたか。よくよく考えたら地上の人間も、弾幕ごっこを目にすることくらいありますよね。心が読めない、こういう機微を捉えにくくなってしまう。

第三の眼を見てみます。頭に入ってくるのは不快なサンドストームばかりでした。まだまだ、怪我を癒すほどの恐怖には足らぬようです。

別のやりかたを、考えなければなりませんね。

§

幻想郷縁起を編纂している稗田家は、人里の中心部に位置する立派なお屋敷でした。

小鈴も貸本屋として、幻想郷縁起の製本を行う印刷工として、稗田家と深い関係があります。

「地獄めぐりツアアの噂は私も聞いているわ。物好きが続々と地底に行ってるみたいね」

九代目の「御阿礼乙女」みあれおとめ稗田阿求ひえだのあきまうは小鈴にそんなことを言いました。

「でも、どうして急に」

「生きてるうちに地獄を味わっておけば、いざ死んだときに地獄行きを言い渡されないように心がけられるって考えかしらね。私から言わせれば、今の地底は地獄じゃないのだけれど」

旧地獄めぐりですの。

「それで、あなたのところに来たお客が地底の妖怪のことを知りたがっていたというわけね？」

「ほかの妖怪に比べると、幻想郷縁起の記述が物足りないとも言っていたわね」

阿求は口をとがらせて、作業途中の筆を置きました。

「地底はねえ、仕方がないのよ。人間が近づくには、あまりにも危険な場所だから。地上の妖怪だったら、直接聞き取りできないこともないのだけれど」

「聞き取れるんだ」

「自分から縁起に載せてくれって、やって来る妖怪もわりといるわ。でも地底の妖怪はそんなことないから、だいたい伝聞ね。記述が薄くなるのも当然だわ」

と、阿求はため息をつきます。地底妖怪の記述の薄さは、彼女自身も自覚していたようです。その様子は阿求にとつても不満げであるように、小鈴には見て取れました。

そこで小鈴は人差し指を立てて目を輝かせ、阿求を見ます。

「あ、でも。今回の地獄ブームに乗じて地底に行けば、幻想郷縁起を補完できるんじゃない？」

「魅力的な提案かもしれないけれど、やっぱり無理ね」

小鈴のアイデアは、あっさり否定されてしまいました。

「あら、どうして」

「御阿礼乙女の立場があるもの。地底なんて危なっかしい場所においそれと足を踏み入れて、万が一幻想郷縁起の編纂に穴が空いたら向こう百年の歴史が失われかねないわ」

「それも、そうか。残念ね」

縮こまる小鈴の前に、阿求は顔を歪めて笑います。

「でもまあ、ブームに乗じて地底に行ってきた観光客がいるのは事実だから。そういう人に話を聞けば、地底妖怪について詳しい情報を得るチャンスもあるかもしれないわ」

「なるほど」

小鈴は深く首を傾げ、今後の増補を願うことにしました。

しかし同時に、こうも考えます。これまで多くの人間が、地底に行って戻ってきたはずですが、その中には、妖怪たちをことつぶさに観察している者がどれだけいるのでしょうか。そうした人たちが、どれだけ阿求に妖怪の仔細をきちんと説明できるのでしょうかとも。

§

幻想風穴の入り口は、幻想郷の東の果てにある博麗神社の裏にありました。時おり風穴から吹き出す温泉は、神社の資源として有効活用されているようです。

その入り口に現れたのは、先ほどの葦子です。手に封筒を抱えておりました。結構な厚さがありますね。風穴に近づきながら、しきりに辺りを見回しております。

その場で腕を組んで立ちすくんでおりますと、風穴から一つの影が顔を出しました。

「とまれ。なんの用だ。この時間にツアー客が来るなんて、聞いてないぞ」

赤く錆びた鎌を両手に構えて、キスメが葦子を恫喝します。今にも噛みつきそうなキスメの前に、葦子は目をぱちくりやりました。人差し指を、自分のこめかみに当てます。

「んー、あなた確か釣瓶落としてのキスメ、だっけ？」

キスメが目を大きく見開いて、動きを止めます。

「よく覚えてるな」

「釣瓶落としなんてトラディショナルな妖怪は、なかなか見そうで見ないからねえ」

「と、とらでし？」

「それより、あなた地底住みよね？ 地霊殿まで届け物を頼まれてほしいんだけど」

とたんに顔をしかめます。

「この私を使いつ通りに使おうってのか」

「私が行きたいのはやまやまなんだけど、こっちにいる時間は限られてるし、レイムッチには近寄るなって言われてるし。たいへんなものじゃないからさ、お願いできないかな」

「まあ、あそこには報告に行かないといけないし。大したものじゃないというなら」

董子は安堵の微笑みを浮かべると、キスメに封筒を掲げてみせました。

「これ、この前地底に行ったとき撮りまくった写真なんだけど。プリントサービスって初めて使ったけど便利よねー。って、言ってもわかんないか」

聞き慣れない片仮名言葉よりも前の聞き慣れた単語に、キスメの耳がぴくりとなりました。

「写真？ 天狗とかが使ってるやつか」

「たぶんキスメちゃんが写ってるのも、どこかにあるわ。集合写真も出しといたし」

「気やすくちゃんづけするな」

キスメの剣幕に構わず、董子は封筒の中に入った紙束をめくり始めました。

「あつた、これこれ」

封書の中から一枚を取り出します。キスメはその鮮やかな様に、目を見張りました。天狗の新聞と比べるとずっと鮮明ですし、きちんと色までついています。

それはかつて董子が地霊殿に迷い込んだ際、たまたま居合わせた旧地獄の妖怪たちとともに写したものでした。いちばん端っこに、キスメの姿もちゃんとあります。

「写ってる」

「そりゃ写真ってそういうものだからねえ。見たことなかったのかしら」

「あ、あるに決まってる」

顔を赤くするキスメの前に、封筒が差し出されます。

「じゃあ、確かに預けたから。地霊殿までよろしくお願いね」

童子は手を振って、いそいそと神社へと引き返していききました。相変わらず慌ただしいかたです。キスメの手元には、写真が入った封筒が残りました。

ずっしりとくる封筒を、まじまじと眺めます。

キスメは鎌を桶の中に収めると、封筒から改めて写真の束を取り出しました。

一枚一枚めくってみます。旧地獄の刑場、旧都の繁華街、私やこいし、お隣とお空、勇儀、パルスイ、ヤマメなどが個別に撮られた写真があります。

キスメが写っているものは、最初に見た集合写真だけでした。

それをしばらく眺めたあとで、集合写真だけを写真の束から別にして懐に隠します。残りを封筒に戻して桶にしまい込み、風穴をするすると降りていきました。

自宅の横穴を通り過ぎて、さらに下へ向かいます。やがてヤマメが張った蜘蛛の網が見えてきました。ちょうどヤマメが網の上で背を伸ばしています。キスメはそこへ降りていきました。

「おや、どうしたね？　まだ客の来る時間じゃあないが」

顔を上げるヤマメを前に、一度懐を握りしめました。

「あのね。相談したいことがあるの」



2784545018048



2920193015002

地底に突如として旧地獄めぐりブームが沸き起こる。さとりは今が好機とばかりに人間からの恐怖集めに奮闘する。しかし良いことは長く続かず、大怪我で心が読めなくなるわ、雇ったはずの地底妖怪たちが離反して新しい宿を始めると災難続き。しかも逆恨みに燃える疫病神が虎視眈々と地霊殿の財産をつけ狙う。

しかしそんな苦境においてもさとりは何者をも恐れず、凶たく振る舞う。その理由とは？

東方外來章編の例のアレで大きく評価が変わったとされる「自己評価11点の女」こと古明地さとり。その辺を踏まえて地獄妖怪の関係を地霊殿十周年にしてリライトしてみた意欲作（のつもり）です。